



おすすすめの一冊

山極寿一、鈴木俊貴

『動物たちは何をしゃべっているのか?』

本

書は、鳥の研究者とゴリラの研究者おふたりの対談です。著者のおひとり、動物言語学者の鈴木俊貴さんが、鳥が会話していることを突き止め、「シジウカラの文法を解明した」と書かれた帯に、ワクワクしました。シジウカラの囀りは、「もの」を示す言葉（単語）で、規則ある順序で発せられ、仲間に複雑なメッセージを伝えているというのです。

もうおひとり、人類学者であり霊長類学者で、特にゴリラ研究の世界的権威として知られる山極寿一さんです。本書を読み進むうちに、ヒトには備わっていない多様な手段で世界を認知している動物たちの能力を知って、ヒトに似ているとか、近いとかの比較で優劣を論じることの偏見や傲慢さに気づかされました。動物たちのコミュニケーションを通して、ふたりの対談は、私たち人間のコミュニケーションの課題へと展開していきます。



山極寿一
鈴木俊貴

動物たちは何をしゃべっているのか?

「タカが来た!」と警告するシジウカラ。親を殺した密猟者を手話で語るゴリラ。

動物たちは何をしゃべっているのか?
山極寿一・鈴木俊貴 著
集英社

山極さんは、言葉や言葉が発達した過程に、人間とはどういう動物なのかを理解するヒントがあると言います。霊長類のコミュニケーションには、言葉以前に、ジェスチャーによる視覚的（非言語）コミュニケーションがありました。二足歩行するようになったヒトにとって、言葉を獲得する以前に、踊り、歌うことも、重要なコミュニケーションだったということ。これ

は、今も変わりません。国や地域を超えた、普遍性がある音楽や踊りによって共感し、一体感が生まれます。ジョイセフが活動するザンビアやケニアで、プロジェクト地域の人たちが素晴らしい踊りや歌を披露してくれることがあります。踊りの輪の中に入ると、言葉はわからないのに、途端に仲間になれるように感じるの、非言語コミュニケーションの力なのでしょう。

ヒトの脳は、文字を獲得して、脳の外づけデータベースを手に入れたために縮んでいるそうです。「言語化」という言葉を最近よく耳にしますが、言葉で説明することが重視され、その一方で情報を削ぎ落として「短く」「早く」伝えるメディアが主流となり、文字では伝えきれないもの、例えば感情や気分、幸福感などは、軽視される社会になりつつあると本書は警告しています。

本書は、さまざまな切り口で楽しめます。最後に、深く納得したことをもうひとつ。ヒトはそもそも共同体全体で子育てをする動物。音声言語はそのために進化したというのです。だから、産後に女性が孤立してワンオペで子育てするなど、本来あり得ない状況です。コミュニケーション全体で子育てするような社会にならなければ（もちろん、それだけではありませんが）、少子化は止まらないのかもしれない。

勝部 まゆみ

かつべ まゆみ

公益財団法人ジョイセフ代表理事・理事長。開発途上国で活動する日本生まれの国際協力NGOジョイセフの活動に惹かれて入職。ベトナム、ニカラグア、ガーナ、タンザニアなどでリプロダクティブ・ヘルスプロジェクトに携わった。